

私はこう  
考える

「子どもは  
元気」が  
いいのか？

## 幼稚園の中にある「元気な子ども信仰」

徳田克己

私は幼児期の親と子どもの心理的な問題を専門に研究・活動していますが、年間一、〇〇〇件以上ある相談の中には、「うちの子どもはいつも部屋の中で

絵本ばかり眺めていて、少しも元気がないんです」という親の訴えがあります。子どもが飛び回っていなければ何か問題を抱えているという見方をする親がいるのです。幼稚園への巡回活動の中でも、保育者から同じような相談を受けることがあります。

それでは「元気」とはいったいどういうことなのでしょう。幼児期の子どもは飛び回っていただけば問題があるのでしょうか。性格的におとなしいために、また病気や障害があるために、一見すると元気そうに見えない子どもたちがいいます。その子たち

は本当に元気がない子どもなのでしょう。本稿ではそれらについて考えてみたいと思います。

### 幼稚園文化の中の「元気」

インターネットで幼稚園の教育目標を調べてみると、そこには、元気で仲良く、元気いっぱい、明るく元気に、元気でたくましく、健康で元気に、元気・勇気・根気などのように、「元気」という言葉がたくさん出てきます。

また、数年前に私が数百園の幼稚園歌の歌詞を分析した研究結果では、何と66%の園歌の歌詞の中に「元気」が登場しました。

昔から、外で走り回る子どもの姿を「元気な子ども

も」としてとらえ、身体が元気なことが好ましいと考える文化が日本の中にあつたからでしょう。いや、日本だけではなく世界のどの国でも同じかもしれない。私は子ども文化の研究のために、世界の六十余りの国・地域を回って絵本を調べてきましたが、雪、海、川の中で遊んでいる子どもの姿が、それぞれの文化の中で多く描かれています。

### 保育者の考える「元気」とは？

この原稿を書くにあたって、親しい若い保育者五十名ほどに、「子どもの元気をどうとらえているか」についての無記名の質問紙調査をしました。

その結果、「園庭で思いっきり身体を動かすことが大切だ」と考えている保育者が全体の88%もいることがわかりました。さらに「子どもは元気なことが一番」(90%)であり、また「幼稚園では元気に活動することが大切だ」(72%)ととらえている保育者が多いことがわかりました。一方、教室の中で絵本を読んでいることが多い子どものことを「元気が

ない」ので気になるという回答が68%もありました。やはり保育者は身体をたくさん動かすことが元気なことであるととらえる傾向があるんですね。しかし、興味深いのはADHD(注意欠陥多動性障害)のある子どもに見られるような動きの激しさを元気に感じる保育者は19%しかいなかったことです。目的のない衝動的な動きではなく、遊びの中の意味のある動きが元気な状態としてとらえられているのです。

### 身体の元気と心の元気

保育者に「身体の元気と心の元気は異なるか」を尋ねたところ、82%の保育者は「異なる」と答えました。しかし、中には、健康な身体にこそ健康な心が備わると考えている保育者もいて、園にいる間は少しでも身体を動かして運動発達を促すことが心を元気にする唯一の方法であると力説していましたが……。

身体が元気なことは、病気をしていない、けがをしていない、身体を自由に動かせる、よく寝ている、食欲がある、生活リズムが整っている状態であると



考えている保育者がほとんどでした。つまり、きちんと生活できている健康な子どもというイメージです。すね。

一方、心が元気なこととは、笑顔でいること、気持ちをうまく切り替えられること（クヨクヨしないこと）、お友達と仲良くできること、表情が明るいこと、自分の気持ちを素直に表現できること、いろいろなことに興味を持つていること、心が満たされていること、他者に対する思いやりがあることなど、回答が多岐にわたっています。無理にまとめてみれば、子どもが、明るく、気持ちが安定していて、いろいろなことに積極的であることを指しているといえるでしょう。

### 病気や障害のある子どもの元気とは

右に述べたように、身体の元気と心の元気を分けて考えるならば、身体が自由に動かない病気や障害がある子どもも、心が元気な状態であれば「元気な子ども」であると考えられます。

今回の質問紙調査では、身体の元気と心の元気を区別して保育者に尋ねたために、保育者は自分の考えを整理して答えてしまいました。しかし、単に「元気ってどういうこと？」と尋ねると、おそらく身体の元気な状態だけを回答する保育者がほとんどであったと思います。ある保育者は「病気や障害のある子どもには元気がないと見えてしまうのは仕方がない。クラスの子どもたちにも『病気になったAちゃん』が早く元気になるようにお手紙を書こうね」と言っている自分がいる」と答えています。

このくらい身体を動かせたら元気がある状態であるという、他者と比較する基準があるわけではありません。保育者は一人ひとりの子どもベースライン（普段の状態）を見極めることが大事です。障害のある子どもの中には、外から見ると、元気があるのかわからないのかを把握しにくい子どもがいます。しかし、その子の日常の姿をよく見ていてベースラインがわかっていると、「この子がこんなしぐさを見せたり、こんな表情をしたりする時は満足しているし、喜ん

でいる」ということをつかめます。他児との比較ではなく、その子どもの変化として、元気がどうかを判断することができます。

### 子どもの元気をどう考えればよいか

昔から「外を飛び回っている子どもが一番いい」という元気な子どもも信仰が幼稚園の中にあります。園のイベントの際の園長先生のあいさつや保育参観の際の保育者の言葉の中にも、この言葉は頻繁に登場します。お便り帳の中にも、今日は元気だったとか元気がなかったという表現がたくさん出てきます。この信仰が問題になるのは、身体が元気な子どもだけが評価され、性格的におとなしい子どもや病氣・障害のある子どもには問題があるのとらえられることです。

今回、質問紙に回答したことによって、保育者は「元気には身体の元気と心の元気の二種類がある」ことを知り、それらを分けて回答することができていました。つまり、もともと子どもの見方が柔軟な

保育者は、少しのヒントが与えられることによって意識を変えることができたわけです。

このことから考えて、研修会や先輩保育者のアドバイスから「心の元気な子ども」を評価する視点を若い保育者の中に持たせることができると思います。そして、若い保育者が子どもたちにも、身体が元気なことと心が元気なことの二つとも「元気な子ども」であるということを伝え、また心が元気であるというのはどういうことなのかを具体的に教えていくことができます。そうすることで「飛び回っている子どもが一番いい」という大人の物差しの影響を受けない他者評価の視点を子どもたちは身につけることができます。すなわち、「みんなちがって、みんないい」という見方です。

これまでの狭い、身体の元気だけをとらえた元気を幼稚園の中からなくして、心の元気を含めた新しい元気観をつくっていくことが重要です。その考え方が新しい幼稚園文化として根付いていくことを期待しています。

(筑波大学)